

四身説)を合本合迹・開本開迹・開本合迹・開迹合本の四種類にまとめ、そのうち『撰大乘論』については開迹合本とする。ただ、吉蔵は同じく世親の釈となる『法華論』・『十地経論』を開本合迹としており、両者を会通して、応身に「亦自亦化他」の徳を持たせている。吉蔵のこのような理解は、吉蔵の仏身論において特徴的とされる応身を二つに分ける内応・外応の考えに繋がると考えられる。内応とは仏性が顕われたもの(如如境・自照)であり、法身と相応したものである。また、外応とは菩薩を教化するもの(如如智・覚他)である。

吉蔵の理解した法身とはどのようなものであったか。吉蔵は法身を性空、寂滅、実相の異名として考えており、実相については「故知。假名宛然而即是實相也。」(T42, 126c)と述べている。この吉蔵にとつての実相とは仮名を通じたものであり、仮名を超越した何物かなのではない。もし応身に法身としての意義を持たせると応身は本身にして迹身でもあるということになるが、この本・迹については、「若離陰有佛人法則並便不相成。本迹亦爾。」(T42, 141b)と述べ、また僧肇の「本迹雖殊。不思議一。」・「豈近捨丈六。遠求法身者哉。」という言葉を用いし(T37, 15a)、「本身と迹身は別次元に存在するようなものではなく、迹身のはたらきの中に顕われるものなのである」と述べている。また、衆生は法身とは「百非を超え四句を絶す」ものだとして法身と衆生とが隔絶されたものであるとの考えを起こしてしまうが、そうではないのだと説き、「因縁即寂滅性。寂滅性則施四句超百非。故如來品以寂滅爲法身。又只丈六即是法身。(略)。涅槃云。吾今此身即是法身也。」(T42, 154b)と

説明する。このわが身がそのまま法身なのだと言うのである。それはつまり内応に法身としての属性を持たせているのである。また、このような考え方は吉蔵の独創というよりかは、三論教学の二諦の理解に基づいて導き出された理論であろうと考えられる。

最後に、吉蔵の『撰大乘論』の引用について述べると、平井俊榮博士による指摘の通り吉蔵は『法華玄論』において仏身論を著述するにあたって、浄影寺慧遠の仏身論を超越するため、慧遠が見ていなかった『撰大乘論』・『法華論』に基づきながら三論教学によって自己の仏身論を理論立てた。そして、その後撰論師との論争が始まると、撰論師の唱える法身の理論は超越的なものを立ててしまっている仏身論であるとして、『撰大乘論』を多く引用しながら、その理解の誤りであることを指摘したのである。

### 『十地経』における第九地の位置について

平賀 由美子

『十地経』の十地説を概観すると、まず初地の冒頭において諸の衆生たちに菩提へ向かう心が起こるとし、発菩提心の行為主体である諸の衆生たちと初地に住する菩薩との連続性が明確にされている。そして順次、初地より布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧(般若)を各地において修め、いわゆる六波羅

## 第9部会

蜜の菩薩行が第六地において完成され第七地に入ると説く。その第七地ではこれらの六波羅蜜と更に方便、願、力、智を加えた十波羅蜜、更には一切の徳目が刹那ごとに完成されるといふ。その理由として、初地より第七地に至るまでに菩薩が実現した智慧を実現する徳目は、第八地より始めて完全な究極に至るまで、身体と心と言葉の働きをしない（無功用）状態において実現されるとする。つまりは第八地以降では「無功用なる状態」で前七地をはじめとする一切の菩薩行の徳目が完成されると理解されるが、それは如何なることなのか、本発表では特に第九地を中心に検討した。

第七地に菩薩は「善弁決択三昧」に入り、その智慧と方便とによつて浄められた三昧を得、大悲の力によつて声聞、縁覚の地を超え、無生法忍を目的にするという。そして第八地に至つて菩薩はその無生法忍を具足する。その際、菩薩は諸仏世尊たちからまだ菩薩にはない、諸如来たちのもつ十力・四無畏・不共仏法の成就を求め、精進に励むようにと諭される。それは「法忍」に安住することなく、更なる階梯へと向かうよう、如来から菩薩に対する衆生救済への促しであり、またそれは菩薩自身のもつ初めに起こした誓願、即ち「法界のように広大にして、虚空界を究め、未来の限りを尽くし、一切の衆生界を救済する」を根底とする。

そしてその誓願に基づいて第八、九、十地では、菩薩を行爲主体とする加持がなされることを特色とする。その菩薩は第八地の冒頭に「如来の加持がよく加持される菩薩」と説明される。その如来の加持とは十方の仏国土の諸如来たちから菩薩に

なされる加持であり、またそれは「世尊のもつ本の誓願なる加持」に根拠がおく。つまり無生法忍を得た菩薩は釈尊に連なる諸如来たちのもつ本の誓願に基づいた加持がよく加持された菩薩となり、その無功用なる境界から菩薩自身が加持の行爲主体となる菩薩行へと移行する。

第八地と第九地とは共に善弁決択なる三昧上の無量なる認識対象を観察した覚慧によつて、菩薩は衆生に対する利他を願い加持をされる。そのうち第八地では自他平等なる如来の無碍智を得て、自己の身体に誓願に基づいた加持をして一切の世界を建立し、その莊嚴された世界において菩薩行を種々に示現するのに対し、第九地ではその世界に対して言葉による分節化が行われ、個々それぞれの存在が菩薩の説法を通じて明確にされる。

第九地に入る菩薩は先述した不共仏法等を修め、さらに「大悲の加持を得ることを放棄しない」と説明される。それについて『十地経論』では「衆生を利益することを捨てずして大涅槃を示現するは、大悲の大願力を捨てざることを得るを以ての故」といふ。菩薩は第九地に至つて説法者としての弁才の力を完成するが、その際、衆生の心や煩惱等を細やかに観察し、諸の衆生たちの行爲の多様性を如実に知ることが説かれ、それぞれ機根等の差別に随つて、ありのままに法を説示する。また四無碍智の智慧を実現し大いなる説法者となり、無数の陀羅尼を得て如来の面前においてただ誓願のみによつて法門の光明を受けとる。それをふまえて菩薩は一切の三千大千世界に遍く満ちて法座に坐り、衆生の意樂に応じた法の説示、即ち不可説なる

法門の説示に至るのであり、加持はここでなされる。説示の方  
法も *deśayati* だけびなく、*ajñāpayati*, *nīścarayati*, *viññāpa-*  
*yaṭi* と多様となる。以上の無功用なる菩薩による菩薩行の完  
成は次の第十地において説かれるが、それは別稿に譲りたい。

## 日本律蔵関係章疏にみられる

### 朝鮮仏教認識について

福士 慈 稔

「十二世紀末までの日本各宗の新羅・高麗仏教に対する認識  
についての研究」の一環として、十四世紀頃までの日本各宗の  
戒律関係章疏に引用される新羅諸師名及び新羅諸師章疏の整理  
を行い日本各宗の新羅仏教認識を窺ってみた。対象資料は大正  
新修大蔵経・日本大蔵経・大日本仏教全書中の十四世紀頃まで  
の日本各宗の戒律関係章疏とし、本研究が主研究の一環研究で  
あるため浄土宗系・禅宗系、また日蓮宗等の鎌倉時代成立の宗  
派は対象外とした。法相宗 4 師 8 部、律宗 12 師 27 部、真言宗 2  
師 2 部、真言律宗 4 師 8 部、天台宗 8 師 12 部、華嚴宗 1 師 7  
部、不明 1 師 1 部、計 32 師 65 部の章疏を整理した結果、各宗で  
次のような新羅章疏を引用していることが判明した。

【法相宗】元曉（典拠不明）、憬興（典拠不明）『法苑義林記』、  
道證（典拠不明）、義寂『菩薩戒本疏』、太賢『菩薩戒本宗要』  
『梵網經古述記』

【律宗】円測『解深密經疏』、元曉『菩薩戒本持犯要記』 2 『楞  
伽宗要』『梵網經菩薩戒本私記』『中辺分別論疏』『起信論疏』  
『二障義』、憬興『觀無量壽經疏』『瑜伽論抄』、勝莊『梵網經  
菩薩戒本述記』、義寂『菩薩戒本疏』 5、遁倫『瑜伽論記』 11、  
太賢『梵網經古述記』 8 『菩薩戒本宗要』 6 『起信論内義略探  
記』『大涅槃經述記』『成唯識論古述記』

【真言宗】円測『仁王般若經疏』、義寂『菩薩戒本疏』、太賢  
『梵網經古述記』

【真言律宗】円測（典拠不明） 2 『仁王經疏』、元曉『菩薩戒本  
持犯要記』 2 『梵網經菩薩戒本私記』 2 『菩薩瓔珞本業經疏』  
2 『遊心安樂道』、憬興『涅槃經述贊』（典拠不明）、勝莊『梵  
網經菩薩戒本述記』 2、義寂『梵網戒本疏』 4 『菩薩戒本私  
記』『無量壽經述記』、遁倫『瑜伽論記』 4、太賢『梵網經古述  
記』 5 『菩薩戒本宗要』 2 『成唯識論古述記』 2 『涅槃經古述  
記』、不可思議『大毘盧遮那經供養次第法疏』

【天台宗】円測（典拠不明） 2、元曉『梵網戒本持犯要記』 2  
『梵網經菩薩戒本私記』、憬興（典拠不明）、勝莊『梵網經菩薩  
戒本述記』、義寂『菩薩戒本疏』 5、太賢『梵網經古述記』 4  
『菩薩戒本宗要』

【華嚴宗】元曉『梵網經菩薩戒本私記』『菩薩戒本持犯要記』  
『一道義章』、憬興『瑜伽抄』 2 『觀無量壽經疏』、勝莊（典拠  
不明）『梵網經菩薩戒本述記』、義寂『菩薩戒本疏』、遁倫『瑜  
伽論記』 4、太賢『菩薩戒本宗要』『梵網經古述記』 4

更に日本各宗の戒律関係章疏の新羅諸師章疏引用整理から、  
各宗の表無表章関係章疏及び四分律関係章疏には新羅諸師章疏